

建設業

しんこう

建設産業の
今を伝え未来を考える

11

Nov. 2017

No. 493

特集

災害から地域を守る
建設業だからできること



平成29年度下期

建設業経理検定試験のご案内

第23回 建設業経理士検定試験(1級・2級)

第37回 建設業経理事務士検定試験(3級・4級)

1 試験日程

【試験日】 平成30年 **3月11日**(日)

受験申込期間 平成29年11月17日(金)~12月19日(火)

合格発表日 平成30年 5月10日(木)

2 試験地

47都道府県主要都市で実施します。

3 受験料 (消費税込)

1級 → 1科目 7,410円

2科目 10,600円

3科目 13,680円

2級 → 6,280円

3級 → 5,250円

4級 → 4,220円

2級・3級 → 11,530円

3級・4級 → 9,470円

※その他手数料:310円(消費税込)

4 お申込み等はこちら

一般財団法人 建設業振興基金 経理試験課

 **03-5473-4581** (平日9:00~12:00、13:00~17:30)

建設業経理検定

検索 



02

災害から地域を守る

～建設業だからできること～

寄稿：地域建設業の現状と今後の産業政策に望むこと

東京大学大学院経済学研究科 教授 大橋 弘

学生を対象とした「土のうづくり体験」で

地域の防災意識の向上に貢献

一般社団法人 愛知県建設業協会

特集

冬の暮らしを守る～地域の建設業が担う除雪作業について～

一般社団法人 新潟県建設業協会

災害時の情報共有・情報発信について

～岩手県建設業協会の取り組み～

一般社団法人 岩手県建設業協会

平成29年7月九州北部豪雨の災害対応

地域の建設業者の力を結集し復旧作業に尽力

福岡県土木組合連合会朝倉支部

PRESCRIPTION

08 日本経済の動向 新興国の株価好調は続くか

09 建設経済の動向 業績好調も利益率向上はそろそろ限界？

10 連載 かわいい土木【第7回】

◆ 白川橋／岐阜県加茂郡白川町

12 しんこうTODAY 振興基金の活動報告

高校生の作文コンクール 国土交通大臣賞 受賞作品

「魂の継承」 富山県立高岡工芸高等学校 辻 乃々子さん

「将来の夢」 鹿児島県立鹿児島工業高等学校 新村 歩夢さん

私たちの主張 国土交通大臣賞 受賞作品

「私の生涯をかける大工という仕事」 ジロー・工務店 大澤 仁朗さん

「俺…、感動している」 矢作建設工業株式会社 紀伊 保さん

「女性親方に」 新日本建工株式会社 宮本 亜衣子さん

16 連載 空に近い和み空間へ 屋上散歩【第3回】

◆ 屋上「かまたえん」(東急プラザ蒲田)

Webサイトを
全面リニューアル
しました!

「建設業しんこう」は
Webでもご覧いただけます。

建設業 しんこうWeb

建設産業の今を伝え未来を考える



http://www.shinko-web.jp/

しんこうWeb

検索



災害から地域を守る ～建設業だからできること～

日本は、世界有数の地震大国・火山大国であり、数多くの急峻な河川を抱え、毎年襲ってくる台風や集中豪雨により河川の氾濫や土砂くずれなどが発生しています。さらに国土の約半分は豪雪地帯に指定されています。こうした厳しい自然環境において、災害から人々の生活を守る重要な役割を担っている地域の建設業について紹介します。

寄稿

地域建設業の現状と今後の産業政策に望むこと



東京大学大学院経済学研究科 教授

大橋 弘

Profile

【研究分野】

産業組織、競争政策、科学技術イノベーション政策、経済政策

【その他の主な活動】

- 建設産業政策会議 地域建設業ワーキンググループ 座長(2017年～)
- 社会資本整備審議会・交通政策審議会 臨時委員
- 食料・農業・農村政策審議会 委員(企画部会長)
- 経済財政諮問会議 専門委員・経済財政一体改革推進委員会 委員

わが国の建設投資は平成4年度をピークとして減少傾向をたどり、平成22年度にはピークの5割減に相当する42兆円まで落ち込んだ。その後は増加に転じているものの、その回復には大きな地域差が生じている状況にある。許可業者数は最近では鈍化傾向とはいえ、ピーク時のほぼ25%減となっており、また家業として建設業を営む社は深刻な事業承継の問題に直面している。景気回復を背景に、経営赤字を解消した事業者のなかには、休廃業や解散を選択しているものもあり、インフラの維持管理に支障をきたす地域も発生している。担い手の安定的な確保が困難な中で、インフラの守り手である中小建設企業の経営力は弱体化しているばかりでなく、自治体の中にも発注体制の維持が困難になるところが出始めている。

過去の建設産業政策において、減少する公共投資と比較して過剰な供給構造を適正化するために、公正な競争環境の整備を通じた競争の活性化等が謳われた時期があった。しかし人口減少下における単純な競争の活性化は、過度な価格ダンピングを生みだし、除雪などしっかりした供給基盤が求められる地域ほど、競争の悪影響を強く受けたように見受けられる。

地域建設業は「地域の守り手」として、災害時には被災情報の

収集や道路啓開、応急復旧工事の実施など、地域のインフラとして準公共的な役割を果たしてきた。建設投資が右上がりで伸びるような成長期においては、こうした準公共的な役割は、事業収益を内部補助することで支えることができたが、最近の事業環境の中では、地域によっては建設業協会に加入しない事業者も増えており、防災協定に応じる事業者は減少の一途を辿っているようだ。

こうした現状において、地域の守り手を維持するためには、準公共的な活動に対しては、きちんとした手当を行政として行うことが求められる。その点で、『建設産業政策2017+10』は、多くの貴重な提言に富む盛り沢山の内容が含まれている。例えば、市町村が地域建設業振興計画を作って、建設部と商工部とが連携して建設業を地域創生のパートナーとして位置づけることや、地域インフラを維持修繕するための新たな発注契約方式の導入、また地域貢献に対する評価をきちんと顕在化することなどは、是非とも進めて欲しい点だ。

人口減少と老朽化するインフラストックの増大という未曾有の環境の中で、建設業はわが国経済・社会の課題を先取りしているように見える。建設業から他産業の範になるような先進的な優良事例を生み出されることを強く望みたい。

学生を対象とした「土のうづくり体験」で地域の防災意識の向上に貢献

一般社団法人 愛知県建設業協会 <http://www.aikenkyo.or.jp/>

近年、局地的な豪雨による水害が各地で発生しています。水害から家や家財を守るために活用される「土のう」。一般社団法人愛知県建設業協会では、「建設業だからできること」をテーマに、「あったらいいな!! 土のうで浸水から守ろう」運動を展開しており、平成24年から県内の高校生等を対象として「土のうづくり体験」を実施し、地域の防災意識の向上に向けた活動を行なっています。活動から今年で6年、これまで12校で実施してきました。この活動について同協会専務理事の大西克義氏、上席の平野正公氏にお話を伺いました。



「土のう」づくりを通して建設業へ関心を持つきっかけに

きっかけは、東日本大震災復興支援を機に、建設業の災害に対する活動に注目し、協会内に災害対策委員会を発足させた際、「防災を通じて地域に貢献できることは何か」と考えたことでした。この地域は古くは伊勢湾台風、平成12年には東海豪雨で被災し、近い将来に南海トラフ巨大地震が起これと言われています。最近では突発的な洪水・浸水被害が起これる可能性も高く、災害のニュースで建設業の活動は報道されなくても土のうは目にしているということで、「土のうづくり」に着目しました。災害には「自助・共助」が求められますが、地域は高齢化が進み、今後は若い人の力が必要と感じ、また、高校生が社会に目を向けるきっかけにもなると思い事業をはじめました。

透させるのは難しいので、この「楽しみながら」やって貰い、「やって良かった」と感じて貰うことを大切にしています。



体験後は土のう袋やスコップなど機材を寄贈

土のう袋や砂のほか、一輪車やリヤカー、生徒が使うスコップなどを学校に持ち込み、体験終了後はそのまま学校や地域の方に使っていただけるよう寄贈しています。そのため土のう袋は劣化しにくいUV加工素材を使用し、この学校に「土のう」が残るといったことが、終了後も学校を通じた地域へのPRになっています。

また、こうした活動は会員企業の協力があることです。やはり地域のことを一番知っているのはその地域の企業ですので、体験を行う高校に近い地域の企業に行ってもらうようお願いしています。

防災ガイドブック「備える!!」も作成

土のうづくり体験は、いろいろな防災イベントでも行なっています。このほか、防災に関する活動として、地震・津波・豪雨などにどう備えるかや被災時に役に立つ情報を幅広く掲載したガイドブック『備える!!～これだけは知っておきたい「いのち」の守り方』を作成し、イベントや学校行事にて配布しています。地元ラジオ番組の中に持つ協会のコーナー『ラヴなご♡』でも防災に関する広報活動も積極的に展開しています。

建設業は「建てる」「つくる」というイメージが強く、防災というイメージになかなか結びつきません。「土のう」をきっかけに建設業が災害から地域を「守る」というイメージを持って欲しい、地域に根ざした建設業者は地域のことを良く理解しており、地元に対して責任を果たしていきたい、このような思いから、防災意識を高めると同時に地域の建設業のイメージアップにつながるよう、これからも活動を続けたいと思います。



協会が作った防災に関するガイドブック



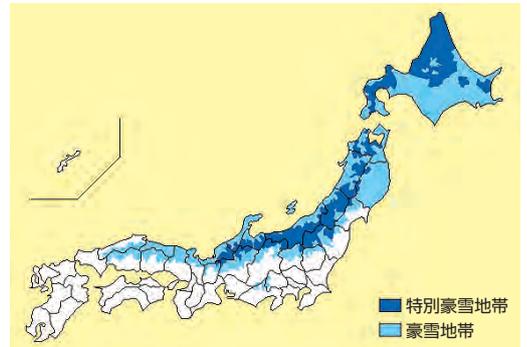
土のうづくり体験の様子。作った土のうは地域の人たちも自由に使えるようシートに覆われ保管される

土のうづくり体験では、最初に愛知県の職員による出前講座で防災に関する座学を受けた後、土のうを作る、運ぶ、積み上げるという一連の作業を行います。スコップを持つのも初めてという子も多く、とまどいも見られますが、やり始めるとだんだんと表情が変わり、楽しみながら積極的に取り組んでいます。防災の意識を浸

冬の暮らしを守る～地域の建設業が担う除雪作業について～

一般社団法人 新潟県建設業協会 <http://www.shinkenkyo.or.jp/>

日本は国土の約半分が「豪雪地帯」に指定されています。建設業者は、降雪時には除雪等により道路の通行を確保し、地元住民の暮らしを支えています。冬本番を控え、豪雪地帯の一つである新潟県の新潟県建設業協会、阿部事業部第一部長と大関総務課長代理兼事業課長代理のお二人から、建設業が担う除雪作業についてお話を伺いました。



■ 図1 豪雪地帯及び特別豪雪地帯指定図
(全国積雪寒冷地帯振興協議会HPより)

作業時間帯について

雪は気温が下がる深夜に積もることが多く、通常の除雪作業は早朝から開始し、住民が出勤・通学する7時頃までに完了し、通行を確保しています。

必要な知識と技術

積雪によって、どこまでが道路なのかよく見えないこともあります。また、道路にはマンホールの蓋などの障害物もあり、これらを傷つけないように、かつ迅速に作業するには、地域の地形や道路の状況が頭に入った上で高い技能が求められます。

機械の操作に長けている人が、すぐに出勤できる体制が必要ですから、除雪作業を担えるのは、地元の建設業者の他にいないのではないのでしょうか。作業をする方も地元の住民ですから、誰がどこに住んでいるとか、地域の交通事情などもよく分かっています。建設機械の運転資格さえあれば誰でも出来るという仕事ではありません。ほとんどの機械は二人乗りで、一人が機械を操作し、もう一人が安全確認などを担当します。こうして若手は実践経験を積み、ベテランから技能を受け継いでいきます。

非常事態で建設業協会が力を発揮

年によっては、地元の建設業者だけでは対応できないような量の降積雪に見舞われることがあります。そのような非常事態では、建設業協会のネットワークが力を発揮します。平成24年には妙高市内に県内各地から、平成26年には群馬県、埼玉県、山梨県の県外に新潟県建設業協会の会員企業が除雪の応援に駆けつけ、雪で孤立した住民の生活を守りました。

若い力募集中

除雪に限らず、地域の建設業者は、各地域の人々の暮らしを支えているという誇りと高い使命感をもって仕事をしています。若い人たちには、是非、地元に貢献できる建設業に興味を持ってほしいと思います。

「雪国にいがたの除雪～冬の道の守り人～」

<https://www.youtube.com/watch?v=3f1jBIXaFqA>



雪国の日常風景には、それを支える人の思いがある。

除雪作業で活躍する主な機械

小回りが効く力持ち！ 除雪ドーザー



スピードがあって圧雪にも強い！ 除雪グレーダー



雪を掻き込んで飛ばす！ 除雪ロータリー



災害時の情報共有・情報発信について～岩手県建設業協会の取り組み～

一般社団法人 岩手県建設業協会 <http://www.iwaken.or.jp/>

岩手県建設業協会では、日々の協会活動を「いわけんブログ」(<http://www.iwaken.or.jp/info/>)で情報発信しています。東日本大震災においては、発災翌日には久慈支部から現地の情報が発信され、被災地の情報が乏しいなかで大変注目を集めました。岩手県建設業協会がIT化の推進を牽引してこられた広報委員会委員長の向井田副会長と村上千蔵支部事務長のお二人に同協会の情報共有・情報発信の取り組み等について、お話を伺いました。

協会イントラネットの構築が始まり

まず、協会内部の情報共有についてお話しします。平成13年頃になるとと思いますが、ITコンサルタントの桃知利男氏の指導を受けながら、協会イントラネットを構築しようと活動を始めました。ちょうど電子納品・電子入札が推進され始めた頃でしたが、パソコンやインターネットがまだまだ普及していない時代です。先進地の事例を見たり、役員さんたちを説得したり、県内各地で講習会や説明会を開催したりしました。平成16年には、当時の会員企業約760社を結ぶ、全国的にも類を見ない全県単位での運用を開始しました。協会という組織である以上、企業規模に関係なく全会員を結んで情報共有を行って来ました。災害などの緊急時にも本部・支部間の情報共有に活用して来ました。

「いわけんブログ」のコンセプト

内向きの情報共有から、外向きに情報を発信しようと始めたのが、平成19年に運用開始した「いわけんブログ」です。理屈ではなく、我々の普段の活動を県民の皆さんに見て知って貰おうというのがコンセプトになります。最低限の投稿ルールは決めています。内容は行事でもいいし、桜の開花などの地域情報でもいい。文章も簡単でいい。ルールで縛りすぎると抵抗感が出てしまう。

毎年、13支部の職員と会員企業から選抜したITサポートチームの合同研修会を継続しています。繰り返して研修を行うことで投稿数が確実に増えています。投稿数などで、よくやってくれている支部には表彰もしています。

災害時における迅速な情報発信について

日頃から投稿することで、職員の能力が自然に上がります。東日本大震災や昨年の台風10号災害など、非常事態の中でも迅速に情報発信ができました。投稿を見て、不足している物資を送っていただいた例もありました。毎年の研修会では、テクニカルなこと以上に「何のために投稿するか」という目的を教えています。

なお、3月11日を協会の「防災の日」と定め、情報伝達訓練を実施しています。震災の経験から、最悪の事態でも比較的有効だった衛星携帯電話を導入しました。災害時にインターネット回線が強いことを踏まえ、スカイプを使ったビデオ通話も導入しています。発電機はコ



向井田副会長

ンパクトで使いやすいものとしてガスカセットボンベ式のものを選択しました。デジカメのGPS機能を使って地図上で情報共有できる仕組みも構築中です。これらを活用した訓練を繰り返し実施しています。



いわけんブログより東日本大震災翌日の投稿

災害時に情報発信する難しさ

被災して犠牲者がいるような現場でシャッターを切ることは葛藤があります。情報を発信する際は被災された方々への配慮を忘れてはいけません。また、迅速さも大事ですが、錯綜する情報を整理して出さないと余計に混乱を招いてしまうことがあります。情報を整理することが本部の重要な役割だと考えます。

使いやすさが重要

ITはあくまで手段であって目的ではありません。知識と技術がある人だけが使えるということではダメです。今後、より使いやすく、より安価なものが出てくれば切り替えていくことも必要です。情報共有や情報発信することが目的ですから、とにかく誰にでも使いやすいということが重要です。

漫画「我らイワケン株式会社」

岩手県栗石町在住の漫画家そのだつくしさんに制作を依頼。

作者自ら実際の建設現場に足を運び、「縁の下の力持ち」としての建設業の姿を率直に表現。岩手日報やNHKにも取り上げられる。意外なところでは歯科医師会を通じて県内の歯医者さんにも常備。少年院でも読まれている。作成にあたって、向井田副会長は、飾らないリアルな建設業を表現してもらおう気を付けたとのこと。



http://www.iwaken.or.jp/cat-79/post_20.html

平成29年7月九州北部豪雨の災害対応

平成29年7月に起きた九州北部豪雨では福岡県朝倉市や大分県日田市において集中的な豪雨により土砂災害が発生し、甚大な被害をもたらしました。このような想定外の災害の中、昼夜を問わず応急復旧に尽力したのが地元の建設業の皆さんです。突然起こる災害に対し地域建設業はどのような役割を担い、行動したのか、福岡県土木組合連合会朝倉支部の平田立身支部長^{ひらた たつみ}にお話を伺いました。

降り続いた豪雨、続々と入る復旧応援要請



平田立身支部長

朝倉支部のある甘木地区は、雨は激しく降ってはいったもののあまり被害はありませんでした。被害が集中したのは荷原川(甘木から車で約15分ほどの場所)から大分県日田市にかけてです。県からは5日の夕方頃に、夜以降危ないかもしれないということで待機要請がありました。実質的に活動したのは6日になってからのことでしたが、ここまで大きな被害になるとは思いませんでした。朝倉市は5年前にも豪雨の被害があり土砂災害が発生しましたが、とにかく今回は流木の量も多く、5年前と比べて数倍もの規模でした。市内にある寺内ダム、江川ダム、施工中の小石原川ダムが大量の土砂や流木を堰き止め、下流域の被害軽減に繋がりました。もしこれらのダムがなかったら被害はもっと拡大していたでしょう。



昼夜を問わず続けられた復旧作業(写真提供:国土交通省九州地方整備局)



発災当初は情報が錯綜し混乱も

当支部は現在27社の企業が所属しています。東峰村、朝倉市、筑前町の3つの地域に分けて不定期ですが、地域の自主パトロールなども行っています。福岡県朝倉県土整備事務所とは「風水災害時の緊急対策工事等に関する協定」を締結しており、地域で災害が発生した場合はその場所に一番近い企業へ直接県から連絡が入り、対応するようにしています。今回の復旧作業では朝倉支部の会員企業のほか協定を結んでいる42社が対応にあたりましたが、発災当初、情報はかなり錯綜しました。会員には県や市などから直接連絡があったことで、同じ場所に複数の会社がバッチングするようなこともありました。また道路啓開作業と同時に消防、警察、自衛隊等が人命救助のための捜索を担うのですが、発災直後は混

乱もあったと思います。10日程が経ち、市の災害センターが情報を一元化ようになってから活動がスムーズになったと感じました。

県外からの応援も

現在(9月末取材時点)、主要道路の復旧は完了しており、8月末には崩壊土砂や流木が多量に発生した赤谷川流域(杷木松末地区)などで国による直轄工事が開始され、復旧に向けて動き出しています。

しかしここに至るまでには、建設業各社の不眠不休の働きがありました。私自身も8月末まで作業を殆んど休むことができませんでした。

復旧対応にあたった作業員は延べ約2,000人にのぼります。当支部としては人手が足りない場所への応援要請などを受け付けていましたが、ずっと電話が鳴りっぱなしの状態でした。会員企業の中には自らも被災し、また親戚が行方不明になったという者もいましたが、皆、とにかく1日でも早い復旧を目指して休みなく作業しました。連日、猛暑が続き非常に過酷な中での作業でしたので、安全面や精神面には気を付けるようにしていました。

今回は地域を超えて、多くの団体・企業からの応援もありました。会員企業の下請業者も作業に協力してくれ、久留米支部からは災害が起きてすぐに土のう袋が5,000



被災した比良松中学校と積み上げられた土のう



「クイックホッパー」は1機で連続して2袋の土のうを製作(写真提供:国土交通省九州地方整備局)

地域の建設業者の力を結集し復旧作業に尽力

福岡県土木組合連合会朝倉支部

袋以上届くなど建設機材・資材から飲料水にいたるまでさまざまな物資を支援いただきました。また栃木県建設業協会からは大型土のう簡易製作機「クイックホッパー」を3台提供いただき、堤防や法面の土留めに必要な大量の土のう製作に役立ちました。従来は1日当たり120袋くらいが限界でしたが、この機械の導入によって製作のスピードが倍以上になり、8月末までに15,000袋を製作するなど、作業効率が上がりました。

日ごろのコミュニケーションがあるからこそ

迅速な復旧作業に対応できたのは、豪雨災害の経験があったからということもありますが、日ごろの会員同士のコミュニケーションが生きたのではないかと考えています。

今回は膨大な量の流木を撤去する必要がありましたが、撤去に必要な大型重機はどこにもあるわけではありません。そうした重機の貸し借りなども会員同士でスムーズに行っていました。これは日ごろからのコミュニケーションがあればこそだと思います。また会員だけという枠を超え、動けるところには動く、そうした取り組みもあったことで、発災当初に情報が錯綜しても対応できたのだと思います。

復旧作業中のある現場では作業員に対して、住民から飲み物の差し入れや、お礼を言われることもあったと聞いています。普段は直接お礼を言われるようなことはありませんが、住民の皆さん方も今回のことで、地域の建設業の存在価値について改めて気づいていただけたのではないかと思います。



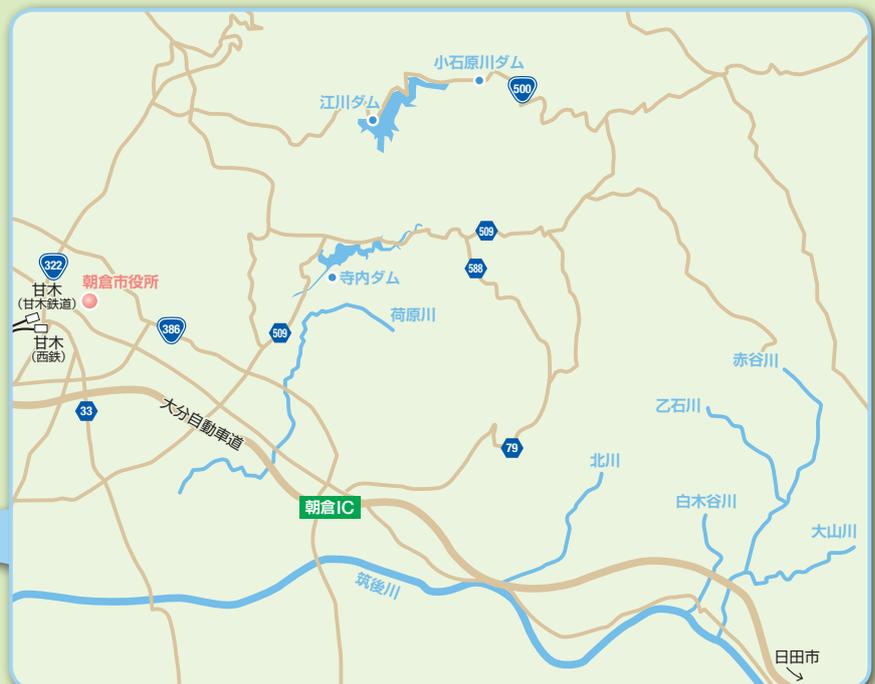
がれき撤去に携わった建設業者へ東峰村瀬谷村長より感謝の言葉がかけられた
(写真提供:国土交通省九州地方整備局)

今後も復旧に向けての作業は続きます。地域にとっての復興への力として、地域の建設業の役割はますます重要性を増してくるでしょう。この地域を一番よく知る私どもが、地域の守り手として、そして地域の復興の要として、力を尽くしていきたいと思っています。



平成29年7月九州北部豪雨について

平成29年7月5日昼頃から九州北部地域、特に福岡県朝倉市から大分県日田市にかけて降った雨は時間を追うごとに激しくなり、6日までに日田雨量観測所で記録した雨量は観測史上最も多い記録的な豪雨となりました。この雨は5年前に起こった豪雨災害に比べると約2倍もの雨量になります(日田観測所記録による)。この雨で河川の氾濫や土砂災害が起こり多くの家屋が被災。また多くの死者・行方不明者を出した災害となりました。





米国の金融引き締めなどの影響に注意

新興国の株価好調は続くか

みずほ総合研究所 チーフエコノミスト 高田 創

世界経済へのインパクトが高まっている新興国の経済情勢は、総じて回復基調にあり、資金流入の継続もあって、株価も上昇している。ただし新興国に関しては、依然として、資金流出リスクなどの不安定要因があることに留意が必要である。今回は、新興国の経済、市場の動向、ならびに今後の注意点などについて解説する。

堅調に推移する新興国市場

年初来の新興国への資金流入により、新興国通貨と株価の上昇基調が継続しており、新興国市場は引き続き堅調である。この背景には、新興国経済に対する安心感があるとみられる。世界経済は循環的な回復局面にあり、新興国経済も総じて回復基調をたどっている(図1)。

新興国への資金流入で、新興国通貨はトランプショックによる下落を取り戻している。株価も上昇し、アジアでは8月に、インドとインドネシアで史上最高値を更新した。さらに、9年ぶりの株高となっているベトナム、1994年以来の株高にあるタイなど、株式市場は総じて好調だ。また、南アフリカでは国民に不人気なズマ大統領の存在がありながら、株価が夏場にかけて最高値を更新した。

資金流出リスクに注意

ただし、新興国に対する楽観的な見方が変化し、急速に新興国市場からの資金流出の圧力が高まるリスクには、一定の警戒が必要だ。夏まで堅調だったトルコも、9月以降資金流出の懸念が生じている。

経常収支や外貨準備、政治情勢など、さまざまな要素をスコアリングして、主要新興国のリスク度合いを総合評価すると、(表)のようになる。この評価によると、新興国からの資金流出の圧力が高まった場合、特にトルコや南アフリカなどに注意が必要であるといえる。

2017年は新興国が予想以上の回復を示したが、依然として、米国の金融引き締めなどの影響という不安定性を抱えていることは、認識しておかねばならない。株価が下落するリスクは、株価の評価が割高な国ほど顕現化しやすい。例えば、株価の予想PER(株価収益率)が過去のレンジと比較して上方に位置している国は、株価が割高になっていると市場で判断されやすいが、多くの新興国では、この点から割高感がみられるため、留意を要する。

また、足元、新興国の対内証券投資は減少してきて

おり(図2)、投資資金の流入に先細りの動きがみられるため、市場の動きを今後も注視していく必要がある。

■ 図1 新興国の実質成長率と株価



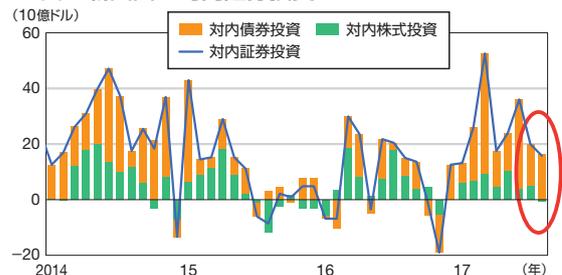
(注)成長率はブラジル、中国、インド、メキシコ、南アなど24カ国を対象
(資料) Thomson Reutersよりみずほ総合研究所作成

■ 表 主な新興国のリスク評価

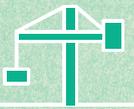
	総合評価	景気判断	インフレ率	経常収支	政策余地	外貨準備	地政学・内政・外交	民間債務
トルコ	D	C	D	D	C	D	C	C
南アフリカ	C	C	C	D	C	D	C	A
ブラジル	B	C	A	C	C	B	C	B
メキシコ	B	C	A	C	B	D	B	B
中国	B	C	A	A	C	B	B	D
インド	B	B	B	C	C	B	B	B
インドネシア	B	C	A	C	C	B	B	B
フィリピン	B	B	A	C	B	C	C	—
ロシア	B	C	A	A	C	B	C	B
タイ	B	C	B	A	B	B	C	B
マレーシア	B	B	A	A	C	D	B	B
ベトナム	B	C	A	A	C	D	A	—
韓国	B	C	B	A	A	B	C	B
台湾	B	C	B	A	B	B	B	—

(注)各要素の評価を基に総合評価。評価は、A(良好)、B(比較的良好)、C(弱含み・懸念あり)、D(著しい弱含み・顕著な懸念あり)、E(危機的な状況)の5段階
なお、評価基準などの詳細は、「新興国不安の現実化リスク」(みずほ総合研究所「みずほインサイト」2015年12月2日)参照
(資料)みずほ総合研究所作成

■ 図2 新興国の対内証券投資



(資料)IMFよりみずほ総合研究所作成



主要建設会社の2016年度決算

業績好調も利益率向上はそろそろ限界?

日経コンストラクション編集長 野中 賢

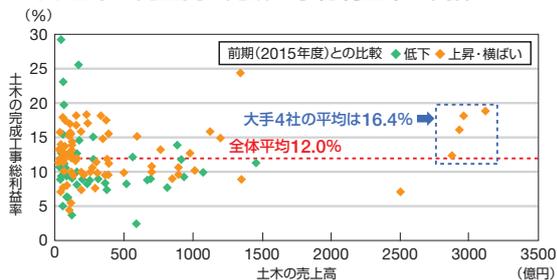
建設会社の業績が好調だ。2016年度の決算に関する一般報道では「過去最高益」の文字が躍り、今後も東京五輪関連などの需要が旺盛。しばらくは安泰とも思える。一方、人手不足に端を発する人件費高騰などの兆しも見え始め、利益率の向上は限界に近付いてきた。比較的余裕がある今、社員の待遇改善など、人材確保のための手を打っておく必要がある。

日経コンストラクションが主要な建設会社を対象に今年夏に実施した調査によれば、2016年4月から2017年3月までに期末を迎えた主要建設会社の決算(2016年度決算)は、前期に引き続き利益が大幅に増加した。利益率の改善も顕著だった。

大成建設、鹿島、大林組、清水建設の大手4社は、いずれも2期連続で連結純利益が最高値を更新。単体の完成工事総利益率は、4社平均で土木が前期から2.8ポイント上昇の16.4%、建築が2.7ポイント上昇の13%。土木では前期と比較して上昇した会社が76社、低下した会社が45社だった(下図)。利益の出ない工事を避ける「選別受注」に加え、設計変更や追加工事が利益拡大に貢献したとする会社は多い。

2014年の「公共工事の品質確保の促進に関する法律」(品確法)改正を受け、公共工事設計労務単価が5年連続で引き上げられたことや、設計変更ガイドラインの改定で、工費が増える設計変更にも適切に対応する機運が高まってきたことも、利益確保に寄与している。

■ 図 土木の売上高と完成工事総利益率の関係



(注)日経コンストラクションが主要な建設会社を対象に、2017年夏に実施した決算調査の結果を基に作成。有効回答は155社。2016年4月～2017年3月に期末を迎えた決算期の決算(2016年度決算)と、その前期の決算(2015年度決算)について、土木の完成工事総利益率を比較。両者を比較可能な122社のデータについて、土木売上高と利益率の関係をプロットした。

2017年度後半から労務費が上昇か コストアップで減益を見込む会社も多い

今後の受注環境についても悲観的な見方は少ない。各社の手持ち工事高が膨れ上がり、施工能力の面で

むやみに受注を増やせないという事情もあって、今回の調査で前期より受注高が増加した会社は約半数にとどまった。ただし、建設需要は2020年の東京五輪まで高水準が続き、五輪後も急激に縮小するとは考えにくい。特に土木の場合、五輪に直接関係する案件は少なく、かつ首都圏の環状道路などの大型案件は五輪後もしばらく続くと思われる。

こうした建設需要の増加に伴い、数年前から労務費上昇の可能性が指摘され続けている。しかし、決算内容を見る限り、まだ利益を圧迫する状況には至っていないようだ。各社からは、「思ったほど労務費が上昇しなかった」との声が聞こえてくる。

ただ、2017年度後半には労務費上昇が顕著になるとの見方が大勢だ。多くの会社がコスト上昇を織り込み、次に期末を迎える決算では減益を予想する。利益率のアップも、そろそろ限界を迎える可能性がある。

人材確保は大手・中小問わず課題 若手に絞って待遇改善する会社も

好決算のなか、ここ数年、各社の経営課題となっているのが人材確保だ。採用に苦戦している会社は依然として多い。日経コンストラクションの調査によると、今年4月入社の新卒採用に関して、売上高1000億円以上の大手では、予定数を確保できなかった会社が45%に上った。中小の建設会社ではさらに厳しく、53%が予定数を採用できていなかった。同様に、中途でも思い通りに人材を採れなかった会社が多く、需給のアンバランスが続いている。

人材を確保する狙いもあり、各社は初任給の引き上げや給与のベースアップなどで社員の待遇改善に力を入れる。例えば、若手社員の待遇を改善したのが大成建設だ。全社員を対象とするベースアップとは別に、今年7月、20歳代と30歳代の社員に絞った賃上げを実施した。平均で基準内給与の6.7%、1カ月当たり2万3,300円引き上げた。



山里に近代の夜明けを 運んだハイカラ吊り橋

白川橋 / 岐阜県加茂郡白川町

岐阜県は北の飛騨地方と南の美濃地方からなる。今回紹介するかわいい土木「白川橋」は、飛騨高山の白川郷ではなく、中濃に位置する白川町に架かる鋼トラス吊り橋だ。急峻な山々に囲まれた村と駅をつなぐモダンな橋は、大正末期のこの地にとってまさに近代化の掛け橋だった。1世紀近くを経て今なお往時のままの端正な姿で町の玄関口を飾っている。

Photo・Text：フリーライター 三上 美絵

大成建設広報部勤務を経てフリーライターとなる。「日経コンストラクション」(日経BP社)や土木学会誌などの建設系雑誌を中心に記事を執筆。広報研修講師、社内報コンペティション審査員。著書「土木の広報～『対話』でよみがえる誇りとやりがい～」(日経BP社刊、共著)



大正時代最後の年となった1926年の3月、岐阜の山あいの小さな村、西白川村(現在の白川町)に、人々が待ち望んでいた鉄道がやって来た。旧国鉄高山線だ。その5年前に岐阜一各務ヶ原駅間が開業したのを皮切りに、1、2年ごとに10kmぐらいつつ延伸し、ようやく村まで到達したのだ。

このとき、新駅「白川口駅」の開業と同時に架設された道路橋が、今回取り上げる「白川橋」だ。

駅と村をつなぐ 掛け橋

高山線は、飛騨川の右岸と左岸を行き来しながら谷筋を縫って進む。この付近で

は、西側の右岸を線路が通っている。白川口駅が設置されたのも、当然ながら西側だった。

ところが、西白川村は、東から流れて飛騨川に合流する白川に沿って発展したことから、飛騨川の東側に居住地が広がっていた。村人たちはせっかく新駅ができて、そのままでは幅100mに及ぶ飛騨川に遮られ、鉄道を利用することができないのである。そこで、駅への動線として白川橋が架設されたわけだ。

下の写真は、現地取材したときに町役場の壁に飾ってあったもの。神官を先頭に、正装の人々が真新しい白川橋を渡っている。岐阜県の発行するパンフレット「ぎふ

歴史的土木構造物」にも同じ写真が掲載されていて「大正15年 完成式典」とある。よく見ると、行列の中ほどに角隠しを被った若い女性が写っているのが、花嫁道中を兼ねているのかもしれない。いずれにしても、ハイカラな鋼製の吊橋を渡る人々はどこか神秘的な面持ちだ。建設当初は床版が木製だったと資料にあるが、この写真でも確かにそう見える。

軽やかな主塔と 土偶的橋脚

鋼トラス吊り橋である白川橋の魅力は、何と言ってもケーブルを吊る主塔の美しさにある。

主塔は鋼材がトラス状に組み、柱と梁をつなぐ部材がアーチ状になっている。ちょっとエッフェル塔の足元部分に似ていなくもない。橋の袂の説明板によれば、桁だけでなく主塔まで鋼トラス構造なのは全国的にも珍しいという。

ガセットプレート(接続部の四角い板)やリズミカルに並ぶリベットが、トラスにアクセントを与えている。主塔の梁の中央には「白川橋」と右から書いた扁額が付いていて、四周をリベットで囲んであるのも、アプリケーションのステッチのようでドボかわいい。

一方、軽快なトラスの主塔を支えているのは、円錐状の柱2本を門型につなげた橋脚だ。どっしりと踏ん張る感じが、土偶の足を連想させる。橋の上から覗き込んで橋脚を見ると、苔に覆われた鉄筋コンクリートの地肌が見えた。年月を経て黒ずんだコンクリートが深い味わいをかもし出している。



大正末の竣工当時の様子。岐阜県の資料には「完成式典」とある。

現在の白川橋は銀色に塗装されているが、現地で出会ったお年寄りによれば「昔は白だった気がする」。床版は木材だった。



橋長115m、幅員4m。約10mの高さの鋼トラス主塔2本でケーブルを吊っている。当時の欧米風のモダンなデザインだが、材料も含めて純国産だ。2006年に土木学会選奨土木遺産、2013年に国の登録有形文化財にそれぞれ指定された。

自然の猛威に耐えた 90年

白川橋の竣工から今年で91年。この間、どれほどの自然の猛威にさらされてきたことだろう。

中でも1968年8月には、白川町の名を全国にとどろかせた大惨事が起こった。この橋から2kmほどの国道で台風による集中豪雨のため土砂崩れが発生し、観光バス2台が飛騨川の激流に転落。乗客104人が命を落とす日本の交通事故史上最悪の事態となった。白川口駅付近でも路盤崩壊と土砂崩れが見つかり、電車が1ヵ月近く不通となったほどだった。

9割を山林が占める白川町は、標高の高低差が激しく、昼夜の気温差も大きい。構造物の耐久性にとって、決して好適ではないはずだ。それでも白川橋の修理は、何度か塗装をやり直し、床版を鋼デッキプレートとコンクリートに変更した程度。それ以外は桁や主塔の鋼トラス、ケーブル、橋脚いずれも1世紀近くの間、架設時のままの姿を保つ。

役場近くのカフェの気さくなマダムが「白川橋は雪景色が一番好き」と言っていた。まちを見守る長老橋は、変わらぬダンディーぶりで人々に愛されている。

アクセス

JR高山本線白川口駅から徒歩1分。
岐阜から白川口までは約1時間半。



補剛桁の銘板には「大正十五年製作 大阪 日本橋梁株式会社」とある。現在も存続する同社は当時、創立8年目の若い会社だった。

主塔を支える橋脚の上部。苔むした鉄筋コンクリートは竣工時のままとと思われる。



駅前の歩道橋から見た全景。

1960年にすぐ下流に見える国道41号飛泉橋が架設され、白川橋は歩行者・二輪車の専用橋となった。

WYESTODAY

振興基金の活動報告



建設技能講師養成講座の実施

建設産業担い手確保・育成コンソーシアムでは、三田建設技能研修センターの協力のもと、9月28日～29日に「建設技能講師養成講座」を実施しました。この講座は、昨年度に検討した建設技能講師養成カリキュラムをベースにして、建設技能講師のスキルアップ、参加者のアンケート結果をふまえた実効性の高いカリキュラムへの改良、講座修了者が講師となることによる新たな建設技能講師の養成等を目的としています。

今回の結果を踏まえて、来年1月に2回目を開催することとしています。



平成29年度1級建築・電気工事施工管理技術検定実地試験の実施

10月15日(日)、平成29年度1級建築・電気工事施工管理技術検定試験が全国10地区(札幌・仙台・東京・新潟・名古屋・大阪・広島・高松・福岡・沖縄)26会場において実施されました。受験者数は建築16,505名、電気10,493名。

今回の実地試験合格発表は平成30年2月2日(金)の予定。



平成29年度(下期) 建設業経理検定試験 受験申込開始

平成29年度(下期)建設業経理検定試験(1～4級)は、11月17日(金)から受験申込を開始する。実施日程は右の通り。

建設業経理検定試験についての詳細はこちら

建設業経理検定 検索

申込書の配布	11月17日(金)～12月19日(火)
申込受付期間	11月17日(金)～12月19日(火)
試験日	平成30年3月11日(日)
合格発表日	平成30年5月10日(木)



平成29年度「作文コンクール」受賞作品が決定 建設産業人材確保・育成推進協議会

建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設業に従事する方を対象とした作文コンクール「私たちの主張」と、全国の工業高校の建築学科、土木学科等の在校生を対象とした「高校生の作文コンクール」を主催し、優秀作品を表彰しています。

今年度の応募総数は1,738作品。「私たちの主張」は503作品、「高校生の作文コンクール」が1,235作品でした。10月6日(金)、国土交通大臣賞を受賞した5名が大臣室での表彰式の後「優秀施工者国土交通大臣顕彰(建設マスター)式典」で朗読をしました。受賞の5作品を13ページから紹介しています。また、優秀作品は「建設のしごと」ホームページに掲載しています。

「建設のしごと」ホームページはこちら <http://www.yoi-kensetsu.com/shigoto/index.html>



国土交通大臣室にて



発表の様子(東京港区メルパルクホール)



魂の継承

富山県立高岡工芸高等学校 辻 乃々子さん

受賞者のコメント

作文コンクールへの応募自体が初めての挑戦でしたが、このような素晴らしい賞をいただくことができるとてもうれしいです。作文にはインターンシップで出会った宮大工の棟梁に刺激を受けたことを書きました。私は建築物の細かい装飾部分を見る事が大好き。将来は宮大工になって修復にかかわる仕事をしたいです。そしていずれは日本のトップになって外国でも教えられるようになりたいと思います。



私の祖父と父は彫刻家だ。幼い頃から二人の仕事をする姿をみてきた。二人は木材を鑿と玄翁と自分の腕で様々なものに変化させていた。その姿に純粋に憧れを抱き、祖父や父のようになりたいと思った。しかし、彫刻というものは、生活必需品とは違い、いつも売れるというものではなく、どんなに素晴らしい作品であっても注文がくるとは限らない不安定な面がある。私の憧れを夢にするには、その部分に少し引っかかりがあった。そのようなややもやとした気持ちを頂いていた私に転機が訪れた。

私は以前から建築物、特に寺社仏閣など歴史的建築物を見てまわるのが好きだった。中でも様々な部分に施してある細かな装飾に自然と目が行き、見入ってしまう。何十年、あるいは何百年とその繊細さを保ち続けるためにはどのような仕掛けがあるのかを調べていくうちに、宮大工とい

う仕事や建築物の修繕・修復の仕事にたどり着いた。これらの仕事は、建築物の修理や保存だけにとどまらず、建立当時の背景やその建築物が歩んできた歴史、あるいは当時の生活や建立に関わった職人の思いまでもを伝える仕事であることを知り、私の夢は固まった。「歴史的建築物の修繕・修復に関わる仕事に就きたい。」

その思いを胸に私は高岡工芸高校建築科への進学を決めた。高校では建築に関する専門的な学習だけでなく、コンベ製作やCADなど実践的なことも学んでいる。そして、何より印象的だったのが、インターンシップである。

私はこの夏、文化財保護の仕事をしている宮大工の棟梁のもとでインターンシップを体験した。その棟梁から「文化財保護という仕事はただ昔のものを新しいものに取り替えるのではない。例えば江戸時代につくられたものを修復するなら、自分も江戸時代の大工の気持ちになることが大切である。当時の技術を知るだけでなく、何を考え、何を思いながらその仕事をしたのか、そういったことを、五感を使って感じることで、自分自身が江戸時代に戻って当時の大工と会話することだ。」と聞き、私の夢の実現に向けての歩みはより力強いものとなった。

当時の大工の精神を受け継ぎ、次の世代へとその歴史や技術や思いを繋げていくこの仕事は、毎日汗だくになりながらも作品をよりよいものにするために魂を込めて全力で仕事に打ち込む祖父や父の仕事ともどこか重なるものがある。祖父や父の仕事への憧れと引っかかりが契機となり、別の形で私の夢が生まれた。今はこの素晴らしい夢に出会うことができた恵まれた環境に感謝しつつ、先人たちのものづくりに対する「魂」を受け継ぎながら、まずは二人を超える職人になれるよう、精一杯頑張っていきたいと思う。

将来の夢

鹿児島県立鹿児島工業高等学校 新村 歩夢さん

受賞者のコメント

作文コンクールへの応募は、クラスの40人の生徒の中から5名選ばれ、その一人が私でした。作文は2時間くらいで一気に書き上げました。今回受賞したことがとても信じられなくて、母に伝えたところ「もう1回確かめなさい」と言われたほど二人でびっくりしていました。私は鹿児島が大好き。将来は市内で就職して、叔母のように子育てをしながら働き続ける女性になりたいと思っています。



私は幼い頃、土木を身近に感じていました。祖父は港湾土木の仕事をしていて、父は型枠大工の仕事をしていました。当時、住んでいた家はリビングに食卓とは別に机がありました。父は仕事を家に持ち帰ってきた時、その机で仕事をしていました。父が何かの図面を描いていたのを何度か見た事があります。祖父も父も今は亡き人になってしまいました。父は時々、現場に連れて行ってくれました。車の中から父の働く姿を見ていたのを今でもよく覚えています。その時初めて家ではあまり見せない険しい顔やたばこを吸っている姿を見ました。私も幼かったので、父が何をしているのか分かりませんでした。かっこよくて「父の近くに行きたい。」とただ単純にそう思いました。

私が中学三年生になった時、テレビのコマーシャルで「地図に残る仕事」という言葉を初めて耳にしました。かっこいいなと思いました。どの仕事も責任があって大切なことがたくさんあるけれど、この土木という仕事のように長い間、残り続けるものは少ないと思います。たくさんの方が関わって年月をかけて造られ、それ以上の長い年月の間、たくさんの人を

助け、支え、自分の造ったものが残っていく「地図に残る仕事」という言葉は、私が土木の道に進みたいと思った一番の理由になりました。その後、弟の自由研究で鶴田ダムに行った時に、建設途中の機械がたくさんあり、骨組みもあり…、その時に土木を職にするという事を実感しました。建築関係に進むか土木関係に進むか迷っていた私は、「地図に残る仕事」という言葉と鶴田ダムの工事現場の大きさ、迫力に魅せられたことを思い出し、土木関係に進むことを決めました。そして今、私は工業高校で土木について学んでいます。少しずつ専門的なことを学び、先生方から現場の話の聞き、もっと土木に興味を湧きました。

私は今、高校二年生です。少しずつ社会が近づいてきています。好きなことを仕事に出来る人は少ないと思います。その少ない中に入れるよう今、いろいろと学んでいます。少しずつ近づいている社会を意識し、学んでいることを生かしていけるよう頑張りたいと思います。

母と出掛けていると、「あれはお父さんが造ったんだよ。」と教えてくれます。その度に、父への憧れと近づきたいという気持ちが大きくなっていきます。父が「型枠がないと造れないから一番大事だ。」と言っていたと母から聞きました。母は「全部無いと出来上がらないのにね、どこに関わってる人でもそう言うんだよ。」と私に教えてくれました。母は父が一番だと思うくらいに誇りをもって仕事をしていたんだという事を教えてくれたんだと思います。

まだ先の話ですが、私が親になったとき、私も子供に自分の関わった仕事を教えたいです。その時に胸を張れるように誇りを持って働きたいです。そして子供にも興味を持ってもらいたいです。

土木の仕事は、何かを造る時、一人ではなく誰かとの共同作業だと知りました。すべて繋がっているのだと思いました。

父から私に繋がったように、私から子へ繋げることが私の将来の夢です。

これから夢を叶えられるように、土木を感じながら、もっと興味を持っていきたいです。



私の生涯をかける大工という仕事

ジロー・工務店 大澤 仁朗さん

受賞者のコメント

もともと文章を書くことが大好き。今回応募したのは、独立したばかりだったので自分や会社のことをアピールしたいのと同時に、これまでの自分の考えをまとめ、若手に向けてのメッセージを送りたいと思ったから。受賞を聞いてびっくりしましたが「やったー!」という気持ちでいっぱいです。業界には大工のいない建設会社もまだありますが、腕のいい大工を抱えられるような会社にして、人材育成にも力を入れていきたいと考えています。



高校を卒業してから、国土交通省による国家プロジェクトの大工育成塾に入り三年間の修行を終え、塾生時代の研修先だった北海道岩見沢市の武部建設株式会社に大工として就職した。二十名近い大工を社員として抱え、墨付け手刻みの新築から、古民家再生、大型木造建築物まで幅広い仕事をこなす会社だった。

そもそも大工になりたいという思いをずっと持っていたわけではない。やりたいう部分の為に大学の指定校推薦を狙って必死に勉強していた高校三年生の夏、ちょっと器用だった私をみて同級生が「おまえ大工になればいい」と一言。口に釘をくわえて頭にネジリ鉢巻き、なぜか動き辛そうなダボダボの作業ズボンをして屋根の上でトントントン、きつと口癖は「てやんでえい!」。そんな大工のイメージを自分の将来に照らし合わせてみた。「悪くない。こりゃ楽しそうだ。」それまでやっていた勉強を辞めて、当時十七歳の若造が自分の将来をあまり真剣に考えず、安易に人生の大きな決断をした瞬間だった。

三十歳になったら独立する。とりあえずそんな漠然とした目標を掲げて大工の道に進んで一年目、建築現場は井戸の中の蛙に容赦なく現実を突きつける。北国の北海道とはいっても真夏の日差しが照りつける屋根工事は部活よりキツイ。真冬になれば連日の猛吹雪が現場を襲い、工期が迫れば親方の無言の圧力で吹雪の中に突入する。足場で作業をしていたら自分が何段目にいるのかわからなくなって遭難した。断熱材として使われるグラスウールは皮膚に刺さるとんでもなく痒い。楽しそうなイメージとはかけ離れた現実だった。

親方は自分の祖父ほどの年齢の口数の少ない大工だった。手取り足取りなんでもっての他。仕事は見て盗め、やれるならやってみろ、そんなスタイルの指導だった。だから細かい仕事はいつも兄弟子が教えてくれた。そんな親方が直接教えてくれたのが刃物研ぎだった。大工仕事は一年目の小僧にとって

俺…、感動している

矢作建設工業株式会社 紀伊 保さん

受賞者のコメント

私は会社で高校生向けの見学会やインターンシップ、中学生の職場体験など建設業の魅力を伝えるような仕事をしていますが、もっと建設業の魅力を伝えたい、イメージアップにつながるようなことをしたいと思って応募しました。受賞にはびっくりでしたがとても嬉しかったです。建設業という仕事は長年やっているといろんなトラブルを経験し苦労もしますがそれを乗り越えてきて今があり感動があります。そんな思いも作文から伝わればと思います。



「一身上の都合で会社を辞めさせていただきます。」これは、今から25年前の私のセリフだ。時代はバブル絶頂期。「独立して、人の2倍働いて3倍稼いでやる!」それが辞表提出の真意だった。

結局、当時尊敬していた上司に慰留され、半年後にバブルがはじけた。世の中は一気に不景気になり、当時の「転職ブーム」の波に乗って、条件のいい

会社を渡り歩いていた元同僚たちは、今では消息すら聞かない。

考えてみると、「転職ブーム」は現代でも、形を変えて若者の心に広がっている。バブル期のような、「2倍働いて3倍稼ぎたい」というものではなく、給料が同じなら、楽で休みが多いところに移りたいというように形を変えた新たな「転職ブーム」が、現代にも蔓延しているのではないだろうか。情報化社会の現代では、就職も転職もスマートフォンのモニターで「初任給、休み、地元」などのキーワードで検索され、ふるいにかけられる。企業理念やその会社の思いは、検索機能ではヒットしないのだ。

彼らは、この仕事を通じて世の中の役に立ちたいという「志」ではなく、単なる「比較」で仕事を決め、しばらく勤めてはまた次の「比較」によって転職しているように思える。

しかし、仕事とは、「比較」ではなく、「感動」するものではないだろうか。

私がまだ新入社員だったころ、鉄道の連続立体交差事業に携わっていた。その工事では、私がすべての測量業務を任されており、工期に間に合わせるために懸命にホームをつくった。しかし、検査では、わずかに10mmの施工誤差のために不合格となり、ホーム先端の10数mをやり直すことになったのだ。職人さんに頭を下げ、何とか期日までに完成させた。

線路の切り替えは、12月9日。体の芯まで冷えるような午前5時2分。いよいよ始発電車がやってきた。私は一人、自分がつくったホームの上に立ってい

女性親方に

新日本建工株式会社 宮本 亜衣子さん

受賞者のコメント

日頃からもっと建設業に女性が入ってくるようになれば…と思っていました。作文コンクールがあることを知り、建設業は女性でも働けるということを知りたいと考え、応募しました。それがまさか受賞とは! 受賞が決まり「私でいいんですか?」と思いましたが、家族や友人、会社の人もすごく喜んでくれて良かったです。私の職業である「軽天・ボード貼り」を知らない人も多いので、この職業のこともわかってもらえるきっかけになればと思っています。



建設業と聞くと一般的に「男性が多い、体力仕事、汚れる」のようなイメージがあるのではないのでしょうか? 私もそのようなイメージを抱いていた一人です。

父親が左官職人として働いていたため、いつも作業服で汚れて帰ってくる姿を見ていました。しかし、作業着が汚れていることが私には悪いイメージとしてではなく寧ろ、カッコいいとさえ思っていました。

職人という職業に興味はありましたが現実、働く機会や接点が私自身にありませんでした。そんな時に人伝えて、香川県に職人育成塾が開校されることを耳にしました。興味を持った私はすぐさま入塾希望を願い出たことを今でも覚えています。

縁があって職人育成塾に入塾することが決まり、入塾後は左官以外の内装業種を知ることになりました。今まで知りえなかった事を学ぶことが新鮮で毎日楽しみに通っていました。

その中でも私が興味を持ったのが「軽天」と呼ばれる仕事です。知れば知るほど、この仕事に興味を持ちもっと、学びたいと思うようになり軽天・ボードの内装工事業を担っている新日本建工株式会社への就職を希望しました。

は本当にわからないことだらけで、成績表なんて無いから、自分がどのくらい出来るようになったのかわからないのがなかなかキツイ。それでもこのノミ研ぎは良かった。昼休みはもちろん、毎日作業が終わってから会社に残って研ぎ場で一人黙々と練習していると、先輩大工達がいつも見に来て評価してくれた。やればやるだけ上手くなるのが楽しくて、毎日必死にやった。自分の大工としてのスキルが目で見えてわかるノミ研ぎが、仕事にのめり込んでいく理由の一つだった。

一つ一つの仕事を覚えていくと、少しずつ一人で任せてもらえるようになる。三年目くらいになると少しわかってくる。自信が付いてくれば自分から親方に「この仕事をやらせてほしい」と頭を下げる。やらせてもらえれば天狗になってミスをする。バレたら任せてもらえなくなるから、反省して夜や休日に出てきてコソソリ直す。わからないところがあれば休み時間にさりげなく先輩の仕事をみに行ったり。外で仕事をしている時に、親方が和室の造作仕事をやっていれば、窓からコソソリ覗いてやり方を必死にメモした。そんな日々の中で少しずつ、仕事を覚えていくのが楽しくてしょうがなかった。

七年目でようやく大きなチャンスがきた。お寺の納骨堂新築工事。そこまで大きくはない建物だったが、その現場の棟梁を任せられた。乗り込み初日にお客さんから念願の一言を頂いた。「棟梁！」嬉しくてしょうがなかった。そう呼ばれる日を待ちわびて頑張ってきたかいたがあった。必死に頑張って、出来る限り

丁寧な、けどお客さんに心配されたくないから平然を装ってなんとか一棟取めた後、次の現場の棟梁の話を受けた。

それから年に二棟くらい、新築住宅を棟梁として建てた。棟梁は現場の作業責任者だ。墨付けから始まって、最後の仕上げまで気を抜くことはない。材料の手配や大工手間の金勘定、協力業者との打ち合わせなど大工仕事以外の業務も任せられる。毎日体も頭もクタクタになって、それでも一棟取めると爽快感で満たされた。

昔何かで聞いた「人生は一度きりしかないのだから、その大半の時間を過ごす仕事にやりがい無くしてはつまらない」という言葉、その通りだと思う。辛いこともあるし、逃げ出したいくなる時もあるけど、仕事を通して人として成長し、そのプロセスの中で多くを学び、やりがいを感じながら日々を過ごすことが人生をより豊にするのだと思う。建設業界の仕事はとんでもなく幅広く、深さは底知れない。機械化が進む現代でも、建設業界はまだまだ人の手が必要とされている。3Kがなんだ、それを上回るほどのやりがいがある。これから仕事を始める若者もきっと楽しめる業界だ。仕事に生涯をかけて人生を全うしている頑固な大人達の魅力にきつと惹かれるはずだ。

三十歳になった今、私はこの業界の大工という分野に生涯をかける覚悟を決めて、三か月前に工務店を開業した。これからの人生が楽しみでしょうがない。

た。再施工したホームの先端は、何度測量して確認しても、列車が衝突しないか不安でしかたなかったからだ。

始発列車がホームに近づいてきたとき、心臓の鼓動がにわかに早くなった。きれいに弧を描きながら滑り込む列車。そのとき、始発電車に乗っていたスキー板を抱えた女の子の姿は、いまま脳裏に焼き付いている。

その瞬間、なぜだか涙があふれてきた。嗚咽するくらいに、止めどなく涙が流れてきたのだ。そのとき、私は気づいた。

「俺…、感動している」と。
その後、現場監督として、たくさんの構造物をつくってきたが、あのときの感動は一生忘れられない。今まで仕事を続けてこれたのは、あの感動があったからだと思っている。

建設業のやり甲斐は、なんとといっても完成の喜びだ。現場では苦勞の連続だが、その達成感ほどの産業にも負けなと思う。これこそが私たちの仕事の誇りだ。

いま、私は管理職として、技術系職員の教育担当責任者をしている。
また、同時に建設業の素晴らしさを学生や子どもたちに伝える活動も続けている。小学生を対象とした「夏休み親子体験会」では、建設機械の試乗や測定の体験をしてもらった。

中学生には、職場体験に来てもらい、高校生には、彼らの学校まで赴いて

「出前授業」と称し、どんな仕事も尊く、その仕事を全力でやることで、自分のモチベーションも成果も大きく変わることを伝えてきた。

そして、今年の新入社員らには、新社会人としての抱負と両親に対する感謝の気持ちを言葉にしてもらい、それを動画で撮影した。新入社員一人ひとりの言葉を収録した29本の動画を編集し、ご両親に宛てて発送した。後日、ご両親から感謝の手紙が返ってきた。

『この度は心温まるDVDをお送りいただきありがとうございます。新社会人を心配する親の気持ちを察して下さい、研修の様子を御教え頂いてホットするとともに両親へのメッセージにも感動し、涙しました。家族みんなで観ました。私は何度も観ました。人間関係に不安なく働ける職場であること、働き甲斐のある仕事であることが伝わって、とても安心できました』

私は、いつも彼らに言う。「転職発想」ではなく、「天職発想」でいよう。
「転職」を否定するつもりはない。でも、「比較」だけで移り変わる「転々・職」では、どこに行っても、自分の仕事を好きにはなれないし、自分の未来やそんな自分自身も好きになれないだろう。

それに対し、どんな仕事でも一生懸命やれば、その道のプロフェッショナルになり、「天職」になるのだ。

やはり仕事とは、感動するものだと思う。お客様も周りの人も家族も、そして自分自身も感動する、私はそんな建設業が大好きだ。

新日本建工株式会社の岡村社長との出会いで人生が激変しました。

働き始めて数カ月、職人育成塾にて一通りの基礎を学びましたが、実際の現場へ入ると現場で学ぶことが数多く、材料の搬入、力仕事が必要となる場合など大変なことが多々あります。大変ではあるけれど、物を作っていく楽しさ、達成感などは自分で実際に経験しないと分かりませんでした。一般的なイメージはまだ変わることは難しいかもしれないけれど、私が以前思っていた建設業のイメージとは違う、思っていた以上のことを今実感できています。

しかし、現状男性が多いこの仕事に、三十九歳の私が入って行く事には勇気と覚悟が必要でした。私は四歳の男の子と二歳の女の子、二人の母親です。今は二人の子どもをこども園へ預けて出勤していますが、作業現場によっては遠方になる事が朝早く子どもを自ら送って行く時間がありません。他に頼める人もいないため、割高になってしまいますが家事代行業者に子どもの送りをお願いしています。金銭面は厳しい状況ですが、会社の理解と家族の支えのおかげで少し無理はしていると思うけど、将来の夢と子どものために続けてられて

います。もっと女性として働きやすい環境、子育てしながら働いていける環境に変化していくことを切実に願うと共に、女性職人が増える事も願っています。建設業で女性が働けるのは難しいと考えている方が過半数以上いるのではないのでしょうか。女性は「働きやすい環境」とそれと「職人になれるきっかけ」があれば、女性職人は増えていくのではないかと考えます。私にとっては、それらが「職人育成塾」でした。女性が現場で働くにはハードルが高いと不安がありましたが、内装業は女性にも活躍の場がある事を現場に実際に入る事で実感しました。

私の夢は、軽天職人として香川県初となる女性親方になること。親方としてバリバリ仕事をしながら子育てもするという両立は大変なことだろうけど、ものすごくかっこいいことだと私は思います。女性でも親方になれる、子育てしながらでも活躍している。というお手本になりたいと思っています。大切なのは自分の努力。努力次第で変わってくることを今の若い子たちへ伝えていくと共に、「女性職人として活躍できる建設業」と、周りからそして社会から思ってもらえるように、これから先、日々努力し精進していきたいと思っています。



屋上「かまたえん」(東急プラザ蒲田)

首都圏・関西にある東急プラザの中で、営業中の店舗では最も古い歴史を持つ東急プラザ蒲田。ここには都内で唯一となっていた屋上観覧車が現在も活躍している。

東急プラザ蒲田は1968年に開業、屋上遊園地も同時にオープンした。その中でも、やはり人気だったのはお城の形をした初代観覧車、通称「お城観覧車」。そして1989年から稼働開始した2代目観覧車だった。第二次ベビーブームもあり、屋上はいつも子どもたちの声で賑わい、蒲田の人たちにとって、東急プラザ蒲田の屋上は大切なふるさとの風景になっていたのだ。

そのことをスタッフが痛感したのは2014年。全館リニューアルに伴った屋上遊園地の一時休止を発表したときのことだ。屋上遊園地の廃止を危惧した地元の人たちから「リニューアル後も観覧車を残してほしい」という要望が東急プラザに殺到。さらに、営業休止前の一週間、住民有志による存続希望のメッ

セージが多数寄せられたという。この声を受け止め、東急プラザは屋上のリニューアルプランを再考し、観覧車は2代目の駆体を活かしてお色直しを行い、屋上に残すこととなった。

同年10月、屋上は子どもだけでなく、大人が来ても楽しく過ごせる「かまたえん」としてリニューアルオープン。「かまたえんの“えん”は、人が集まる“園”と、人と人との絆を結ぶ“縁”をかけたものなのです」と東急プラザ蒲田の広報

担当の清水さんは話す。その願いのとおり、「かまたえん」は、老若男女が集う憩いの場所となり、地元の人々による和太鼓イベントや盆踊り大会も定期的で開催されるようになった。

来年には開業50周年を迎えるという東急プラザ蒲田、そして屋上「かまたえん」。これからも、地元密着型の屋上として蒲田の人たちに愛され続けるはずだ。

(取材・文 浦島 茂世)



羽田空港に近く高層ビルが少ない蒲田。屋上観覧車の一番上からは、晴れた日には富士山が見えることもあるという。



リニューアル後毎年行われている盆踊り



幸せの観覧車
「幸せの観覧車」という名前はリニューアルを機に一般公募で選ばれた。観覧車のほかにも東急電車を模した「エコライド」や、飛び跳ねて遊ぶ空気膜遊具「風の丘」など、子どもが遊べる遊具も。



エコライド



風の丘

屋上「かまたえん」への行き方

「東急プラザ蒲田」はJR、東急池上線、多摩川線「蒲田」駅より直結
営業時間 10:00~18:00(荒候時は中止となる場合があります)
※冬季期間(12月1日~2月末日)10:00~17:00
(営業時間は変更となる場合があります)

大切な社員と会社を守りたい。

ますます制度充実

建設共済保険

法定外労災補償制度



掛金が
安い

補償が
厚い

平成29年 加入促進月間
経営事項審査において15点の加点になります。

10月1日→11月30日

「建設共済保険」の他にも、
次のような事業を行っています。

育英奨学事業

被災者(死亡および障害・傷病3級以上)の子供に対して、要保育期間および小学校から大学までの在学期間中、返済不要の奨学金を継続して給付。

労働安全衛生推進事業

- ① 安全衛生用品の頒布
- ② 女性専用トイレ導入費用に対する助成
- ③ 安全衛生推進者表彰 等

公益財団法人 建設業福祉共済団

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-2-8 虎ノ門琴平タワー11階 Tel.03-3591-8451 Fax.03-3591-8474

建設共済保険

検索

PROFESSIONAL



職長として若手に受け継いでいく
仕事に対する責任感とプライドを

牧野 徹也

1973年4月生
千葉県出身
大州建設工業(株)

さん

二十歳の時、父親の後ろを追いかけるように、憧れの型枠職人の世界に飛び込んだ。あれから二十数年。数々の現場で経験を積みながら、自らの技能に磨きを掛けてきた。

今、従事しているのは千葉県内で進行中の大型土木工場の現場。土木の場合、仕上げ工程がない分、型枠工の仕事が目に見える形で露わになる。それだけに求められる精度はシビア。気を抜けない現場施工が続く。

一方の建築は、ボード仕上げなどで型枠の成果が隠れてしまう。だからといって、妥協することが許されるわけではない。

型枠は建物の基礎的な部分をつくる仕事の一つであり、全体の品質にも影響してくる。手を抜けば、会社の信用にも関わる。それ以上に次の工程を手掛ける人たちに気持ちよく作業をもらうためにも、しっかりとした品質のものを作り込み、引き渡せるようにしたい。

楽しんでできる仕事より、難しかったり、忙しかったりする方が「自分としては燃えてくる」。出来上がった時の達成感が格段に違うからだ。

型枠工の職長として今、19歳から24歳までの会社の若手の指導を一手に任されている。中には女性もいる。けがをせず、とにかく安全に。そのことに「一番気を遣う」。

毎朝6時台には若手と一緒に現場に乗り込み、8時の朝礼開始までの時間を、その日の作業を一通りイメージするのに充てる。ある程度経験を積んだ職人であれば、作業の注意事項など要点を伝えれば済む。しかし、若い人たちは1から10まで丁寧に教える必要がある。

毎朝、しっかりと作業内容を伝えてから施工に取り掛かるが、実は頭の中には、一週間の作業工程が入っている。職長として工程通りに作業を進めていきたいのに、思い通りにならないこともしばしば。「これでは今週の作業が終わらないぞ」。そんな檄を飛ばすこともあるのだという。

世代が違えば、仕事に対する思いも異なる。若者と対峙しながら、職長としての役割をまっとうできるよう、現場施工に勤しんでいる。